

序論

- 聖書は死を真正面から語り、死の向こう側にある希望を示す
- 今日の箇所の問いかけ:「復活を信じるということは、あなたの今の生き方をどう変えるのか?」
- 復活の希望は単なる理論ではなく、毎日の選択、人間関係、人生の優先順位を根本から変えるもの

1)なぜ、死者のためのバプテスマしているのか –死者のよみがえりがなかったらそれも無意味– 「死者のためのバプテスマ」について

- コリント教会で行われていた儀式(具体的な内容は不明)
- 死者と何らかのつながりを持つとしていた
- パウロはこの儀式を肯定も推奨もしていない

パウロの指摘

- 「死者のよみがえりはない」と主張しながら「死者のためのバプテスマ」をしている=言行不一致
- 「よみがえり」がなければ死者は死に囚われたままで何の意味もない
- 本当に死者を惜しむなら、キリストが初穂となつて示した「死者のよみがえり」を信じるべき

2)なぜ、パウロたちは日々死にさらされているのか –よみがえりがあるからではないか– パウロの苦難

- 「エペソで獣と戦った」=困難、迫害、苦難の比喩表現
- 銀細工職人の扇動による暴動、ユダヤ人の陰謀、生きる望みを失うほどの苦しみ

いのちがけで福音を述べ伝え続けた理由

- キリストによって示された「死者のよみがえり」を信じていたから
- この世のいのちよりも、よみがえりによって与えられるいのちに価値を置いていたから
- 復活信仰は、この世のいのちの束縛を超えて、いのちがけでキリストのために生きる力を与える

復活信仰に生きない者の歩み

- 古代ギリシャ・ローマ世界で広く共有されていた人生観
- 現代でも多くの人が「どうせ死ぬのだから、今を楽しく生きた方が良い」と主張
- 死の先に希望を持てない人の発想→「今だけを見つめ、今だけよければいい」

復活信仰を持つ者の生き方

- 永遠の世界を見据えた生き方、この世のいのちに捕らわれない生き方
- ボンヘッファー: 処刑時に「これは終わりではない。私にとってはいのちの始まりだ」
- コリー・テン・ブーム: いのちの危険を覚悟しながらユダヤ人を匿った
- キング牧師: 「私は約束の地を見た。私はそこに行けないかもしれない。しかし、それでよい」

3) 惑わされるな

—よみがえりを信じない人たちの悪い影響を受けずに、正しい生活をしなさい—

「悪い交際は良い習慣を損なう」の実例

- ソロモン王: まことの神様を恐れない異国の女性たちと結婚→偶像の神様に心を向けるようになつた
- 依存症からの回復者: 薬やお酒をやめるために、まず変えなければいけなかつたのは「人間関係」

信仰的に正しく歩むために

- 聖書が教えていることを否定する人や、聖書が教えていないことを語る人たちとの関係は、正しい信仰生活を損なう
- コリント教会の問題(分裂・分派・性的な乱れ)も、復活を信じない人たちの言葉を真に受け、惑わされていたことが原因の一つ
- 神様の力を知らず、よみがえりを信じない人の言葉を真に受けではいけない
- この世界を創造し、キリストを三日目に蘇らせてくださった【主】は、私たちをもよみがえらせてくださる
- だからこそ: 刹那的にこの世の快楽を求めず、神の国に宝を積み、罪から離れ、【主】に喜ばれる歩みをする

結論

三つの問い合わせとその答え

三つの問い合わせ(なぜ死者のためのバプテスマをするのか、なぜパウロたちは日々危険にさらされているのか、なぜ惑わされてはいけないのか)の答えはすべて「復活」に集約される

復活の希望がもたらすもの

- 人生を根本から変える力
- 今日この瞬間の選択を導く力
- この世の価値観に流されず、永遠の視点で生きる力

この一週間への問い合わせ

どのような選択をするか、何に時間を使うか、誰と交わるか、何を優先するか—その選択の背後に、復活の希望はあるか

最後の勧め

神様は、キリストをよみがえらせたその同じ力で、私たちをもよみがえらせてくださる。目を覚まし、惑わされず、復活の希望に生きる者として、今週も【主】に喜ばれる歩みをしてまいりましょう。